

# 「シンフォニー・イン・C」

バレエ団の力量が問われる  
 balan sin の傑作

「シンフォニー・イン・C」は、デヴィッド・ビントレーが敬愛するジョージ・バランシンの傑作。使用されている音楽は、ジョルジュ・ビゼーが十七歳の時に作曲した「交響曲ハ長調」である。当時あまりなじみのない曲であったが、ストラヴィンスキーが若いエネルギーに満ち満ちたこの

音楽を視覚化したバレエ  
 楽章ごとに異なるソリスト  
 見てたえたつぷりの踊り

楽章ごとに男女プリンシパル、男女四人のソリスト、コール・ド・バレエが登場し、最終楽章では全キャストが勢ぞろいして絢爛豪華なフィナーレを迎える構成のバレエであるが、バレエ団にとっては、卓越した技術と異なる個性を持ったプリンシパルが四組、そしてレベルの高いコール・ド・バレエが必要となるため、上演するバレエ団の力量が問われる作品とも言われている。

第二楽章の優雅なアダージオ、第三楽章のシャープなジャンプ、第四楽章の高速で繰り返されるステップの数々など、次から次へと難度の高いクラシックバレエのステップが展開される



©瀬戸 秀美

ビントレーの  
 「ペンギン・カフェ」  
 balan sin の  
 「シンフォニー・イン・C」  
 フォーキンの  
 「火の鳥」  
 10/27(水)~11/3(水・祝)  
 会員郵送受付締切 ● 6/5(土)  
 会員発売期間 ● 6/26(土)~7/7(水)  
 一般発売日 ● 7/11(日)

この作品は、ダンサーにとっても非常に踊りがいのある内容。ダンサーの体の隅々までを熟知していたBalansinによる、プティパへのオマージュとも言うべき作品になっている。(實川絢子)

この作品は、ダンサーにとっても非常に踊りがいのある内容。ダンサーの体の隅々までを熟知していたBalansinによる、プティパへのオマージュとも言うべき作品になっている。(實川絢子)

(榎原律子)



©Bill Cooper



©Bill Cooper

(實川絢子)

する王子といった設定、善と悪の対立、一人の男と二人の女性の三角関係といった構図が非常に類似している。ただし「火の鳥」においては、主役の火の鳥はむしろ黒鳥に似た、燃えるような情熱と欲望、プライドの塊であって、白鳥に似ているのは、イワン王子が最終的に結婚する清楚な王女の方である。そして面白いのは、王子が、

ド・ドゥを踊る相手が、恋の相手の王女ではなくて火の鳥であるという点。王子が火の鳥を捕える場面でのパ・ド・ドゥで、捕われた火の鳥の方が終始王子を力強くリードし、魔法の鳥というよりむしろ妖艶な女性として王子を魅了するという点がなんともユニークだ。

この作品では、トゥ・シユーズをはいでダンス・クラシックを踊るのは火の鳥のみで、あとは男性の主役イワン王子を含め、全員がキャラクターダンサー。王子に至っては、マイムのみで踊りを見せることはない。この設定は、一人トゥ・シユーズに肌の露出の多いチュチュ姿でエネルギー溢れる踊りを見せる火の鳥の異質性を際立たせ、この作品における火の鳥の存在の意味について、観客に疑問を投げかける。

他にも、十二人の乙女による黄金のリングの投げあいや、魔法使いカスチエイのコミカルな演技など、見所はたくさん。

一九二六年上演時のナターリヤ・ゴンチャロヴァによる色彩鮮やかな美術の中で、豊かなロシア民話の世界が繰り広げられる。

## Column



バレエ音楽は舞台を聴こう

ストラヴィンスキーの出世作にして傑作「火の鳥」。序奏の、低弦のうごめきや、ヴァイオリンなどによるフラジオレットのグリッサンドの音を聴くとゾクゾクしますね。演奏会では一九一九年版や四五年版の組曲がおなじみですが、本来の形はバレエ音楽(一九二〇年版)です。

交響曲や管弦楽曲などと違い、バレエ音楽は作曲家が好きな勝手に作曲するのではなく、振付家との共同作業で作られます。「火の鳥」もしかり。ストラヴィンスキーとフォークスは台本について細部にわたり話し合い、この場面に何小節の音楽が必要か、フォークスの指示に従い作曲する。曲のスケッチができるストラヴィンスキーはピアノで弾いて聴かせ、フォークスが踊ってみせてさらに注文し、音楽を修正……という具合です。たとえば、イワン王子登場の旋律。フォークスは、王子が扉を乗り越えやってくる動きを見